

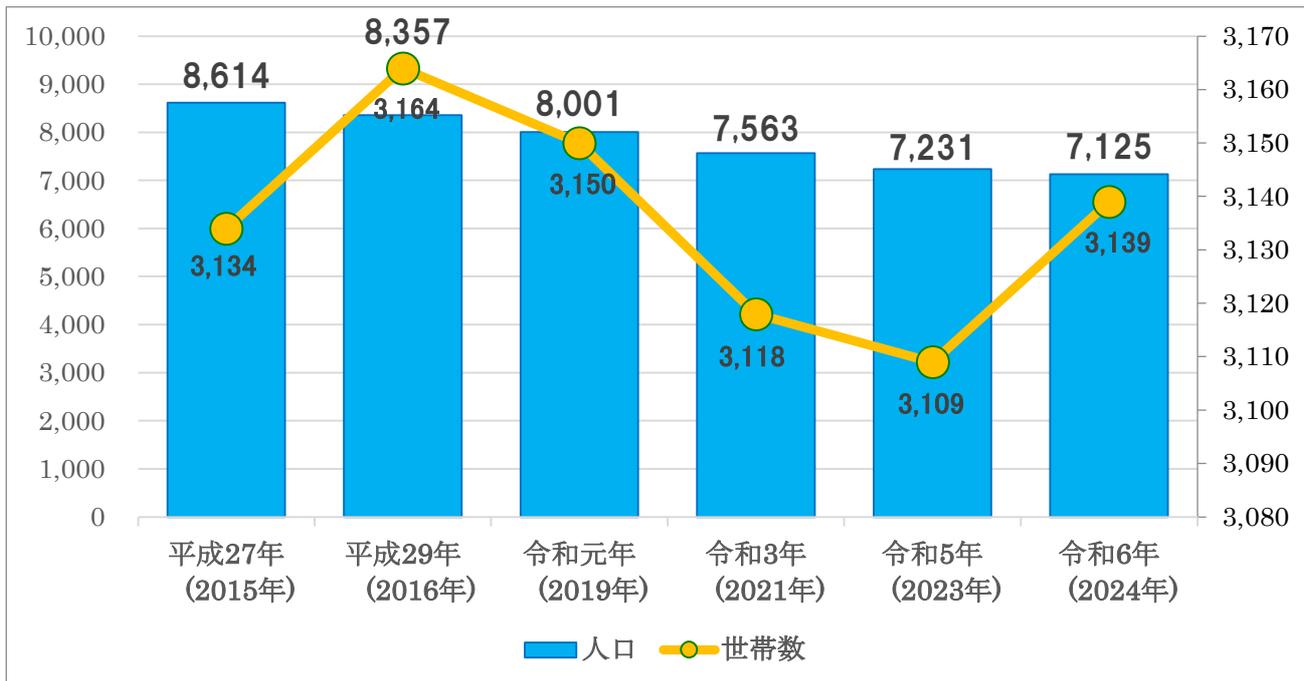
# 由比地区 カルテ

## データについて

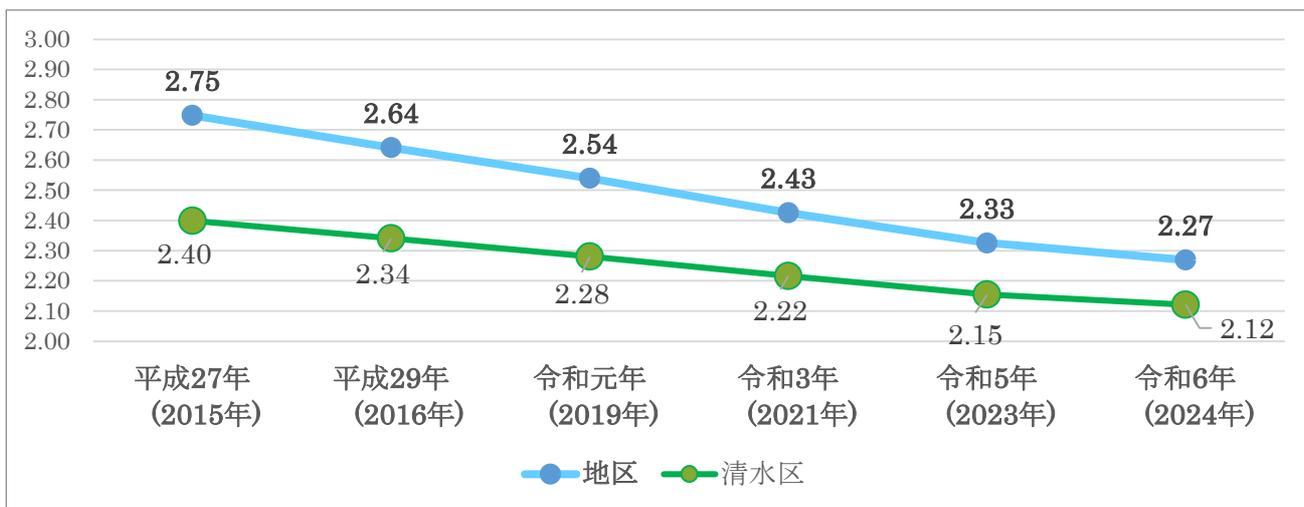
- ・カルテは住民基本台帳と自治会加入統計を利用しています。
- ・住民基本台帳は各年の3月31日の数値、自治会加入数は各年の4月1日の数値です。
- ・町名は住民基本台帳を採用しているため、自治会名と一部異なる場合があります。

由比地区の人口特性 令和6年3月 7,125人 3,139世帯 2.27人/世帯

●人口・世帯数の推移



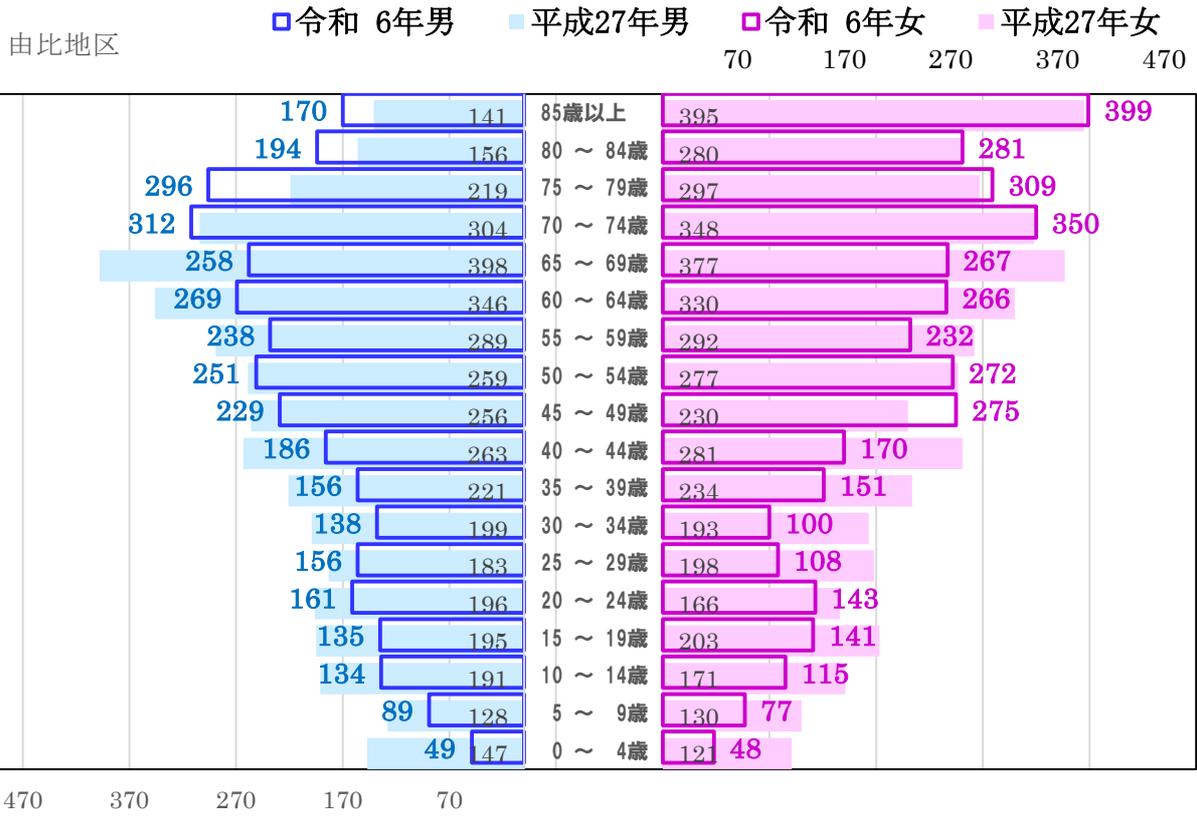
●一世帯当たりの人口推移



●65歳以上の高齢者を支える生産年齢層 (15-64歳)

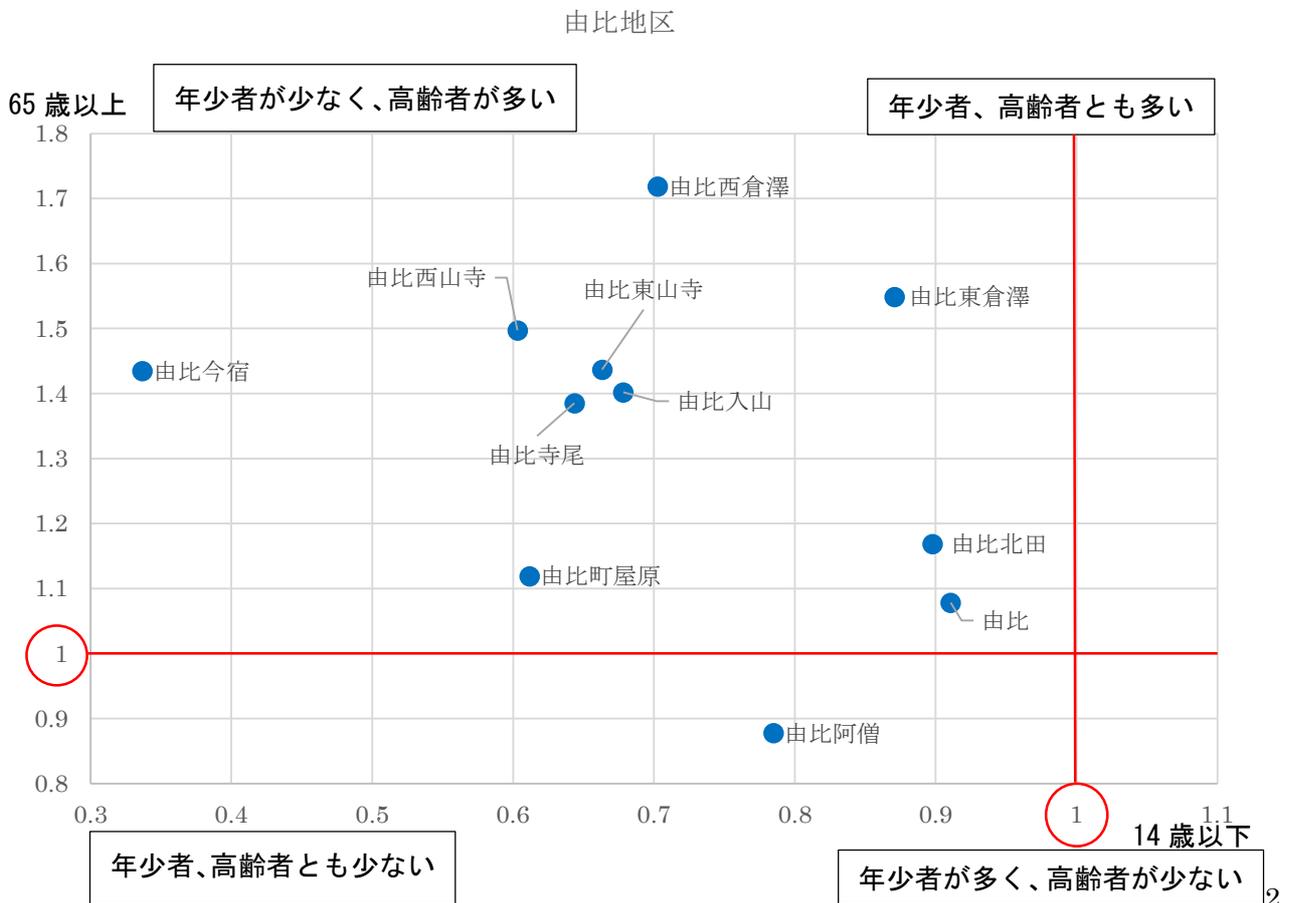
区分	平成27年 (2015年)	令和6年 (2024年)
地区	 1.65人	 1.33人
静岡市	2.16人	1.87人
清水区	1.98人	1.70人

●人口ピラミッド【平成27年(2015年)と令和6年(2024年)の5歳階級別男女別構成】



●町別の14歳以下と65歳以上の割合分布 (清水区の平均値を1とした場合)

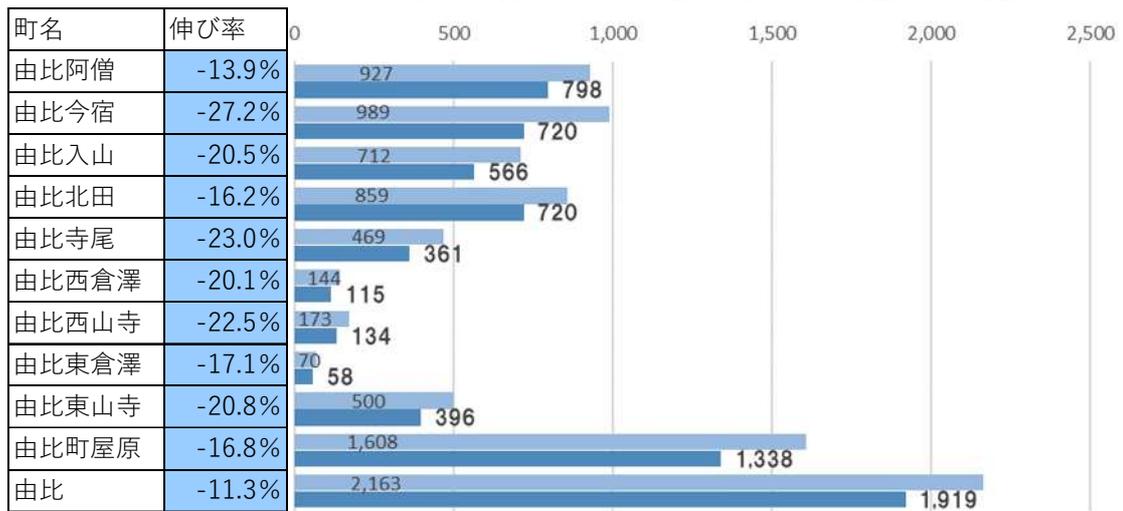
※年少者(14歳以下)高齢者(65歳以上)



●町別の伸び率と人口推移

【平成27年（2015年）と令和6年（2024年）の比較】

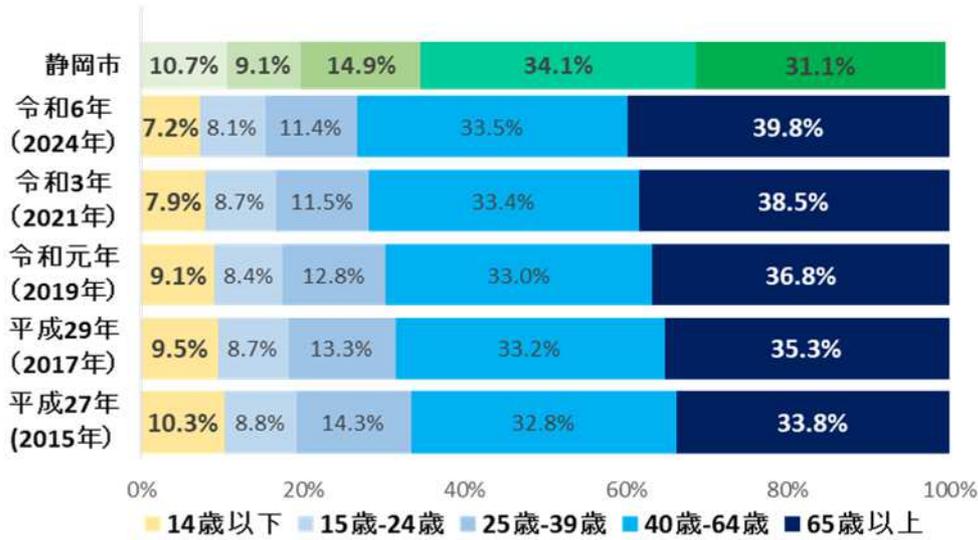
人口推移グラフ（上段平成27年 下段令和6年）



		人 口	
		平成 27 年 (2015 年)	令和 6 年 (2024 年)
由比地区	-17.3%	8,614	7,125
静岡市	-5.3%	713,564	675,610

●町別人口区分別割合

・年齢5区分別人口割合の推移



※15-24歳は高校から社会人(大学修士課程含む) 25-39歳は社会人(大学博士課程含む)

・令和6年人口3区分別：

市の割合より

青字 14歳以下の割合が低い場合

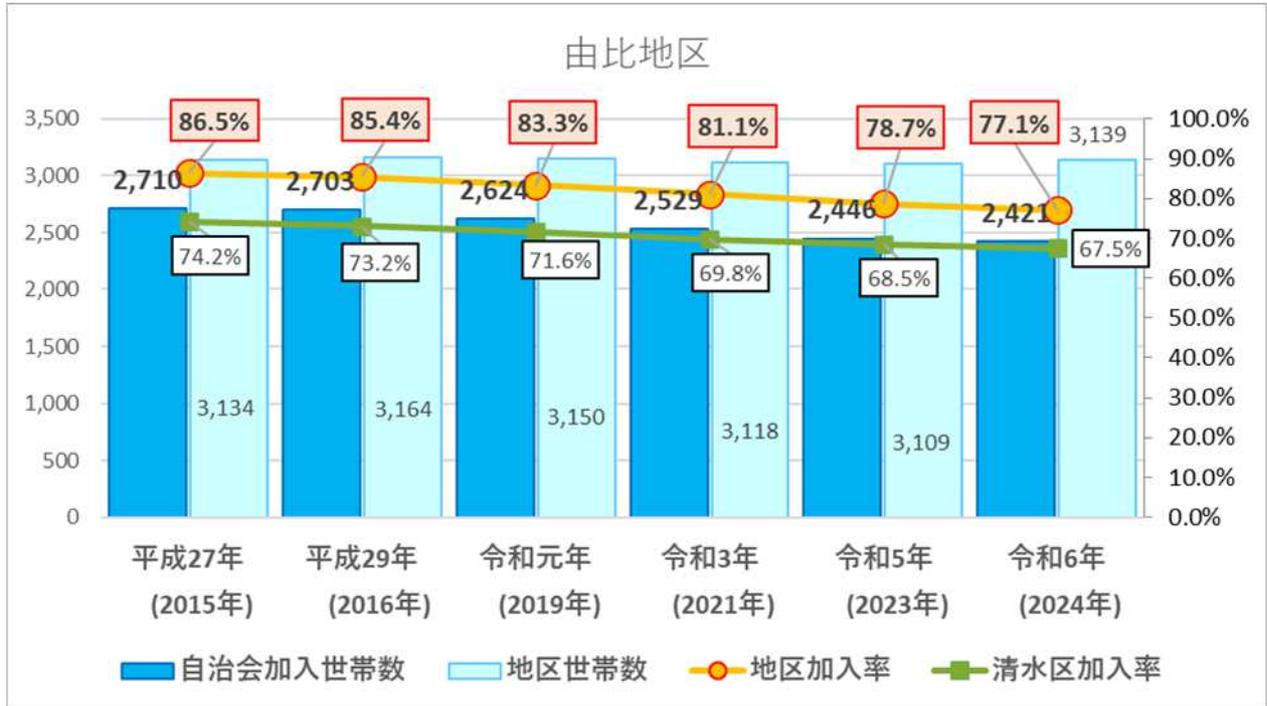
赤字 65歳以上、75歳以上の割合が高い場合

町名	令和6年階級別割合		
	14歳以下	65歳以上	そのうち75歳以上
由比阿僧	7.8%	29.3%	16.7%
由比今宿	3.3%	47.9%	30.1%
由比入山	6.7%	46.8%	25.3%
由比北田	8.9%	39.0%	22.8%
由比寺尾	6.4%	46.3%	26.6%
由比西倉澤	7.0%	57.4%	37.4%
由比西山寺	6.0%	50.0%	24.6%
由比東倉澤	8.6%	51.7%	31.0%
由比東山寺	6.6%	48.0%	25.0%
由比町屋原	6.1%	37.4%	21.6%
由比	9.0%	36.0%	21.6%
由比地区	7.2%	39.8%	23.1%
清水区	9.8%	33.0%	19.3%
静岡市	10.7%	31.1%	18.0%

●自治会加入状況

令和6年

加入率	地区	77.1%	加入世帯数	2,421世帯
	清水区	67.5%	住民基本台帳世帯数	3,139世帯



由比地区コメント

- ・人口が減少傾向にあります。世帯数が増加し世帯人数が減少していることから、単身世帯や小家族化が進んでいるようです。
- ・地区全体が人口減少地区となっています。
- ・令和6年の65歳以上を1人支える生産年齢(15歳から64歳)が市の1.9人より少ない1.3人で減少傾向にあり、若い世代の地区や自治会活動等への負担が増えることが見込まれます。
- ・さらに、自治会の加入率は区の値68%より高い77%ですが、年々減少傾向が見られます。40歳から64歳の自治会活動等で中心的に活躍を期待される層の減少も見られます。

# 由比地区

## 地名のゆかり

「ユイ」は「結」という字を表していて、いろいろなものを結ぶもの。例えば、仲良くする、睦み合う、助け合う、共同で行うなどの意味を持っていたと考えられています。

町内にある正法寺の参道には「ユイ」の語源についての文学碑が建っています。そのかたわらにある、この碑を建立した郷土史家、手島日真の解説文でも「ユイ」とは交わる、交合する、共同、もやい、仲間などを意味し、元結や結納に通じるもの。かつて田植えや秋の収穫時に労力を出し合ったり、漁労や塩作りなどを共同作業していた状態が、地名に転じたのではないかと述べられています。

明治22年（1898）の町制施行で現在の由比という漢字に統一されていますが、昔は発音に対する字を自由なアテ字にして使っていたために、「ユイ」を表す漢字は由井、湯居、油井、由伊、揚井、揚居など多様にありました。

## 薩埵峠

薩埵峠は、東海道興津宿と由比宿の間に横たわる3キロ余の峠道で、古来、箱根、宇津ノ谷、日坂などと共に街道の難所として知られていました。鎌倉時代の資料によると、海岸の波打ち際を利用した道で、到底道と言えるほどのものではなかったようです。

江戸幕府の東海道伝馬制度が定められたのは関ヶ原の戦いから間もない慶長6年（1601）のことで、その後「一里塚」なども整備されましたが、この峠道の開通はずっと遅れて、明暦元年（1655）。この9月、幕府ははじめて朝鮮使節の一行を迎えるに当たり、国の威信に関わると思ってこの道を開いたものと思われています。

薩埵峠には上道、中道、下道の三つの道がありました。下道は峠の突端の海岸沿いの道であり、中道は明暦元年に開かれた山腹を経て外洞へ至る道です。また、上道は、峠を下るところより内洞へ抜ける道であり、この道が東海道本道です。時代を遡ると、薩埵峠はその昔、磐城山と呼ばれており、文治元年（1185）、由比・倉沢の浜で小さな石の地蔵尊が漁師の網にかかって引き上げられ、奇譚だというので山頂にお祀りしました。それ以降の呼称だそうです。



薩埵峠からの景色

## 由比桜えびまつり

「日本一桜えびのまち由比」として、由比漁港で毎年開催されています。

今では貴重となった特産品の桜えび、しらすなどの販売コーナーや、生桜えび・生しらすのプレゼント、桜えびのかき上げなどが食べられる飲食コーナーなどがあり、毎年大勢の人で賑わいます。



由比宿まつり

## 由比本陣公園・東海道広重美術館

由比の中心地、本陣公園。ここは江戸時代に大名、幕府役人、公家など高貴な方々がお泊まりになる本陣、お供の脇本陣、旅人用の旅籠や茶屋が建ち並び、宿場町として賑わっていました。この由比本陣には、正門、石垣、木塀、馬の水飲み場などがあり、江戸時代の生活文化を知る貴重な体験ができます。

本陣公園内には、「東海道広重美術館」「由比本陣記念館」「東海道由比宿交流館」などの施設があります。

東海道広重美術館は、浮世絵師、歌川広重の作品を中心にコレクションされた美術館です。約1400余点の版画が収集され、その中には、世界に数点しかないといわれる「木曾海道六十九次之内・中津川」やゴッホが模写した「亀戸梅屋舗」のような貴重な作品も所蔵しており、浮世絵美術の素晴らしさを満喫することができます。

東海道広重美術館



由比本陣公園



## お太鼓祭り

延暦16年（797）、征夷大將軍坂上田村麻呂が蝦夷討伐の途中で豊積神社に戦勝を祈願し、その戦勝報告に立ち寄ったとき、村人たちが3日間夜通し太鼓を打ち鳴らし、村中を練り歩いて祝ったのが起源とされています。1200年もの長い間、町屋原に伝承されているお祭りで、毎年元旦から3日まで行われます。

お太鼓祭り



## 「親知らず、子知らず」

「親知らず、子知らず」には二つの説があります。

一つは厳しい薩埵峠を越えるには、道幅が馬が一頭やっと通れるだけの「一騎うちの道」で、自分一人が駆け抜けるのがやっとで、親は子を、子は親を労る暇もないほどに走り、駆け抜けて通らなければならないという「難所」説。

二つ目は次のような悲話が残されています。

倉沢村から西にある洞村から江戸に奉公に出ていた忠市が、年季があけ、故郷に帰る途中、倉沢村に叔母がいたので挨拶に立ち寄りしました。

叔母さんは忠市に「近頃、峠には追剥がでるとい話だから、今夜はここに泊まっていくがいい」と言いました。

忠市は早く我が家に帰りたくて、叔母さんの申し出を断って、いそいそと我が家を目指しました。

眼下に駿河湾の潮騒を聞きながら叔母さんの家から洞村のわが家まで半ばという辺りまで来た時です。突然、黒い影が忠市を襲い、倒れた忠市の身ぐるみを剥がすと、一瞬にして体を海に投げつけてしまったのです。

忠市を見送ってから何か胸騒ぎがした叔母は、朝早く洞村の兄を訪ねました。庭先では、兄、忠市の父親が物干しをしていました。

「兄さん、あの着物、まさか…」叔母はその着物に見覚えがありました。

「兄さん、あれは忠市の…」

近頃、峠に出没して旅人を苦しめてきた追剥は忠市の父親だったのです。父親は、昨晚、それが我が子とは知らずに手をかけてしまったのでした。

薩埵峠の頂上から約200m程離れた森の中に、首を括って死んでいる忠市の父親を通りかかった木こりが見つけたのは、それから数日後のことでした。